

授業科目	担当講師名	単位数 1 単位	対象学年
在宅看護論概論	西 裕美	時間数 30 時間	2 年次前期
学習目標 (ねらい)			
1. 在宅看護の目的と特徴が理解できる 2. 在宅看護の対象が理解できる 3. 訪問看護の現状を知り、活動内容が理解できる 4. チームケアの重要性と在宅ケアにおける看護職の役割が理解できる			
回数	単元	学習内容・方法	
1～2	1. 在宅看護の目的と特徴	1. 在宅看護を学ぶにあたって 2. 在宅看護のめざすもの 3. 在宅看護における看護師の役割と機能	
3～5	2. 在宅看護の対象者	1. 在宅看護の対象となる個人の特徴 1) 年齢・疾患・障がい・環境からみた対象の特徴 2. ケアの単位としての家族 1) 家族を理解するための諸理論 2) 家族アセスメントと支援	
6～8	3. 在宅療養の支援	1. 在宅看護の提供方法 2. 療養の場の移行 1) 患者、家族の意思決定支援と調整 2) 退院支援・退院調整	
9～12	4. 在宅看護に関わる法令・制度	1. 訪問看護のしくみ 1) 訪問看護制度の創設と発展経緯 2) 在宅看護に関わる法令・制度 3) 訪問看護制度 4) 訪問看護サービスの提供 2. ケアマネジメントと社会資源の活用 3. 地域における多職種連携	
13～14	4. 在宅看護の展開	1. 療養上のリスクマネジメント 1) 在宅看護におけるリスク 2) 生活上の事故防止 3) 災害に対する準備と対応 2. 在宅看護における権利保障	
15	5. 終講試験及び振り返り	1. 終講試験 2. 学習のまとめ	
評価方法		テキスト・参考書等	
筆記試験 課題達成度		在宅看護論 医学書院 在宅看護論①地域療養を支えるケア メディカ出版 国民衛生の動向 プリント資料	
実務経験 看護師として培った豊富な経験をもとに講義を行う			
備考 公衆衛生学・社会福祉学・看護関係法規・保健医療論・専門分野Ⅱの学びと関連している。			

授業科目 在宅看護論方法論 I	担当講師名 西 裕美	単位数 1 単位 時間数 30 時間	対象学年 2 年次
学習目標 (ねらい) 1. 療養者と家族のもつ看護上の課題を見出し、訪問看護師として支援すべき事柄、看護介入の方法評価のプロセスが理解できる 2. 在宅ケアシステムにおけるケアマネジメントの必要性と方法を理解できる 3. 在宅看護における人間関係確立の基本を理解できる			
回数	単元	学習内容・方法	
1～8	1. 在宅看護の展開方法	1. 在宅看護過程の特性 1) 構成要素 2) 看護の対象者 2. 在宅看護過程の展開方法 1) 情報収集 2) アセスメントの視点 3) 問題の明確化 4) 目標の設定・援助計画 5) 評価・再アセスメント 3. 事例をととして在宅看護の展開方法について考える	
9～11	2. ケアマネジメントの展開	1. 療養者の状況を踏まえてサービスの調整計画立案 2. ケアカンファレンス	
12～14	3. 在宅看護における信頼関係確立の基本	1. 信頼関係形成・意志決定への支援 2. 訪問時の面接技術 1) 初回訪問時の面接技術 2) 訪問時のマナー (服装、言葉遣い、事前の確認) 演習 1. 初回訪問場面で療養者・家族・看護師役を設定 ロールプレイしグループワークで学びを深める	
15	4. 終講試験及び振り返り	1) 終講試験 2) 学習内容のまとめ	
評価方法		テキスト・参考書等	
筆記試験 課題達成度		在宅看護論 医学書院 在宅看護論①地域療養を支えるケア メディカ出版 プリント資料	
実務経験 看護師として培った豊富な経験をもとに講義を行う			
備考			

授業科目 在宅看護論方法論Ⅱ	担当講師名 川崎 幸栄子 (26H) 泊 奈津美 (4H)	単位数 1 単位 時間数 30 時間	対象学年 2 年次
学習目標 (ねらい)			
1. 在宅で療養する対象者および家族に必要な生活援助技術・指導技術を習得できる。 2. 寝たきり者の看護が理解できる。 3. 認知症高齢者の看護が理解できる。 4. 終末期にある対象の在宅看護が理解できる。			
回数	単元	学習内容・方法	
1～3	1. 日常生活の援助技術	講義・演習	
4～6	2. 家庭でのリハビリテーションを継続させる為の援助技術	1. 片麻痺のある対象への援助技術 1) 移動方法、入浴、洗髪、排泄 2) 家庭の状況にあわせた看護技術の工夫	
7～8	3. 医療処置をとまなう援助技術	講義・演習 1) アセスメント 2) リハビリテーションの実際 3) 趣味や生活習慣を取入れた工夫	
9～10	4. 寝たきり者の在宅看護	講義・演習 1. 医療処置と在宅ケア 1) 褥瘡・創傷の処置 2) 自己導尿・留置カテーテル挿入中の看護 3) 在宅酸素・呼吸器管理(人工呼吸器装着) 4) 吸引の援助技術 5) 在宅中心静脈栄・経管栄養(演習) 6) 薬剤管理 7) ストーマ	
11～12	5. 認知症高齢者の在宅看護	講義 1. 寝たきり者の看護 1) 寝たきり者のアセスメント 2) 合併症の予防 3) 社会資源の活用	
13～14	6. 小児の療養者に対する在宅看護	2. 認知症高齢者の看護 1) 認知症高齢者のアセスメント 2) 合併症の予防 3) 社会資源の活用	
15	7. 終末期にある対象の看護	3. 小児の療養者に対する在宅看護 4. 終末期にある対象の看護 1) 在宅における終末期看護の視点 2) 終末期看護の流れと緩和ケア 3) 終末期にある対象の事例展開	
	7. 終講試験及び振り返り	まとめ・筆記試験	
評価方法		テキスト・参考書等	
筆記試験 課題達成度		在宅看護論 医学書院 在宅看護論① 療養生活を支えるケア メディカ出版	
実務経験 看護師として培った豊富な経験をもとに講義を行う			
備考			

授業科目 在宅看護論方法論Ⅲ	担当講師名 西 裕美	単位数 1 単位 時間数 15 時間	対象学年 2 年次後期
学習目標 (ねらい) 1. 療養者と家族や、その取り巻く環境と状況に応じた在宅看護の展開ができる			
回数	単元	学習内容・方法	
1～7	療養者と家族の健康状態に応じた在宅看護の展開	1. 在宅看護介入時期と寝たきりや認知症・重度障害を持つ小児・終末期など多様な状態の療養者と家族を対象に在宅看護の特徴を理解したうえで看護展開を主体的に思考する。 1) 身体・心理的側面と社会的側面を生活環境と家族・介護状況の側面からの情報収集することの理解 2) 療養者の心理的側面から推察し、療養上の望みを中心にした療養生活全体の目標設定。 3) 療養者の生活上の望みに影響すると予測される情報群から関連情報を集めて解釈・判断統合するアセスメント。 4) 家族や多職種と協働を意識して、健康維持と生活の継続ができるような援助計画の立案。 5) 訪問看護制度を理解した中での、看護援助内容の精選。	
8	在宅療養の経過に応じた看護の展開	2. 看護過程の思考プロセスを、療養生活関連図に表現し他者に伝える。 3. 評価表にそって自己評価をおこない事例の振り返りをおこなう。 知識確認として一般・状況設定問題等の筆記試験をおこなう。	
評価方法		テキスト・参考書等	
筆記試験 課題の達成度 グループワークの参加状況		在宅看護論 医学書院 在宅看護論② 地域療養を支えるケア メディカ出版 関連する文献	
実務経験 看護師として培った豊富な経験をもとに講義を行う			
備考 既習の公衆衛生学・関係法規・保健医療論・小児・成人・老年看護学の文献を自ら活用する。 事前に展開する事例に応じた病態理解と看護のポイント、利用可能な社会資源について学習しておく。実務経験のある教員による実践的授業			

授業科目	担当講師名	単位数 2 単位	対象学年
在宅看護論実習	担当教員1人/1G	時間数 90 時間	3 年次
学習目標 (ねらい)			
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地域で生活する人の健康管理の実際を知り、保健所の役割や地域の中で果たすべき看護の役割が理解できる</li> <li>2. 在宅療養生活を維持していくための支援体制が理解できる</li> <li>3. 在宅看護を必要としている対象を含めた家族を1つの単位として捉え、生活現状をふまえた看護援助を考えることができる</li> </ol>			
回数	単元	学習内容・方法	
	<p>臨地実習</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 市町村保健センター</li> <li>2. 地域包括支援センター・居宅介護支援事業所</li> <li>3. 訪問看護ステーション</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地域で生活する人の健康管理の理解 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 保健センターでのオリエンテーションへの参加</li> <li>2) 市町村保健センターで実施されている事業への参加</li> <li>3) 事業へ参加されている人とのコミュニケーションをとおして、健康への意識の確認</li> </ol> </li> <li>2. 地域で療養生活をされている人の生活支援の理解 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 居宅介護支援事業所・地域包括支援センターの事業内容の把握</li> <li>2) ケアマネジメントの実際</li> <li>3) 地域住民や関係職種との連携</li> </ol> </li> <li>3. 在宅療養者の家族支援・生活援助の実際 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 訪問看護ステーションの活動の実際 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 訪問計画にあげられた対象の訪問に同行し援助場面をとおして生活環境・健康状態 介護状態・社会資源の活用状況把握</li> <li>(2) 1事例について療養生活の全体像を把握し援助の方向性を考察</li> </ol> </li> <li>2) 在宅療養生活維持のための支援機関の理解 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 訪問看護ステーションの概要</li> <li>(2) 他職種、施設との連絡・調整・相談の実際</li> <li>(3) 緊急時の連絡体制の実際</li> </ol> </li> </ol> </li> </ol>	
評価方法		テキスト・参考文献	
実習評価表、実習レポートに基づいて総合的に評価する		在宅看護論実習要項 関連する文献	
実務経験	看護師として培った豊富な経験をもとに指導を行う		
備考			

授業科目 看護の統合と実践 I	担当講師名 全教員	単位数 1 単位 時間数 30 時間	対象学年 2 年次
<p>学習目標 (ねらい)</p> <p>1. 対象の形態機能の変化と日常生活行動とを関連させ対象の特性を統合し看護に活用できる。</p> <p>2. 対象の特性を統合し、生活支援技術・診断治療に伴う技術を看護に活用できる。</p>			
回数 (1回90分)	単 元	学 習 内 容 ・ 方 法	
1～8	1. 対象に適した日常生活援助の実践 (15時間)	<p>演習</p> <p>1. 看護の対象としての人間の理解</p> <p>1) 人間が生物として生きていることへの理解</p> <p>2) 人間の生きていることを支える日常生活行動と形態機能との関連</p> <p>3) 対象に生じている形態機能の変化と日常生活行動との関連</p> <p>2. 対象への看護場面のイメージ化</p> <p>3. 対象に対し、安全な援助技術の実施</p> <p>4. 一連の過程の自己評価、自己の課題の明確化</p> <p>5. 課題を達成するための主体的学習</p>	
9～15	2. 生活支援技術・診断治療に伴う技術の対象への実践 (15時間) (事例の活用)	<p>演習</p> <p>1. 健康障害の特性に応じた事例の抽出</p> <p>2. 事例を理解し、必要な生活支援技術・診断治療に伴う技術項目の抽出</p> <p>3. 模擬患者に安全な援助技術の実施</p> <p>1) 援助の目標・計画・根拠を明確にして実施・評価</p> <p>2) 技術練習の実施</p> <p>4. 演習の振り返り及び自己の課題の明確化 リフレクションシートの理解と活用</p> <p>5. 看護に活用できる知識・技術の確認及び対象に実践するための自己学習</p>	
評価方法		テキスト・参考書等	
1-① 1-②の終了時に評価を行いその結果を統合する		1・2年次既習科目の資料・テキストなどプリント	
実務経験 看護師として培った豊富な経験をもとに講義を行う			
備 考			

授業科目 看護の統合と実践Ⅱ	担当講師名 大山 もと子 (8H) 谷川 智子 (2H) 小牧 和代 (19H) 内野 裕子 (6H) 八代 利香 (10H)	単位数 2 単位 時間数 45 時間	対象学年 3 年次
学習目標 (ねらい)			
1. 災害看護の概念を学び人的災害、自然災害の予防策や発生直後からの看護支援を理解できる。 2. 国際社会における保健医療福祉の実情を知り、看護師としての国際協力の必要性が理解できる。 3. 他職種の協働のなかでの看護の役割、医療安全、看護をマネジメントする必要性について理解できる。 4. 既習の知識・技術を基に、看護のマネジメント能力を深め、対象の状況と場に応じた看護を実践するための活用方法を理解できる。			
回数 (1回90分)	単元	学習内容・方法	
1～6	1. 災害看護 (12時間)	1. 災害看護の概念と構造 2. 災害と健康 3. 災害サイクルにそった看護活動 4. 心理的回復の過程 5. 災害への備えとそのシステム 6. 災害時の母子支援 7. 災害を受けた子供と家族の看護 8. 高齢者に特徴的な災害時の看護 9. 災害時の地域における精神保健医療活動	
7～11	2. 国際看護 (10時間)	1. 国際看護の概念・定義 2. 諸外国における保健医療福祉の実情 (グループワーク) 3. 看護師の国際協力活動の現状 (特別講演) 4. 自己のできる国際協力活動についてのまとめ (個人ワーク)	
12～16	3. 医療安全・看護管理 (10時間)	1. 医療安全の基本的な考え方と対策 演習 危険予知トレーニング KYT 演習 実習事例の分析 演習 2. 看護管理の実際と対策 1) 看護サービス提供の仕組みと実際 2) 安全管理の実際 3) 他職種の連携と協働における管理 4) 看護ケアを統合していく力の育成	
17～22	4. 事例展開 (12時間)	1. 防災センター研修 2. トリアージ演習 (DVD) 3. 避難所にいる被災者を想定した生活環境の整備と対応 (図上シミュレーション)	
	5. 終講試験	筆記試験	
評価方法		テキスト・参考書等	
各演習の参加状況 課題レポート 筆記試験		基礎看護学概論 医学書院 プリント	
実務経験 看護師として培った豊富な経験をもとに講義を行う			
備考			

授業科目 看護の統合と実践Ⅲ	担当講師名 全教員	単位数 1 単位 時間数 30 時間	対象学年 3 年次
学習目標（ねらい） 1. 看護現象を客観的、科学的、論理的に捉え、看護を広く、深く追求し続けることの重要性を理解できる。 2. 場や状況に応じた判断力・統合力を結集し、看護を創造し実践する力を高めることができる			
回数 (1回90分)	単元	学習内容・方法	
1～7	1. 看護研究（ケーススタディ）	1. 看護現象の客観的、科学的理解と、論理的表現 1) 自己の看護実践の振り返り 2) 対象の反応について科学的追及 3) 看護実践の論述 4) 批判的思考での評価	
8～15	2. 臨床看護の連携と実践	1. 臨床の場で起こりうる事例の理解 （卒業到達度Ⅱ，Ⅲ，Ⅳレベル項目の活用） 1) 事例に対する看護実践と多職種連携のイメージ化 ①正確で安全な知識、技術 ②優先順位の判断 ③予測性を踏まえた状況判断 ④時間の経済性と効率性 ⑤事例の対象を支援する多職種の理解 2) 看護の統合力の評価 ①知識確認試験 2. 臨床の場における対象者と多職種連携の目標に向けた連携 1) 看護職の役割と責務 2) 対象者について多職種間のコミュニケーション 3) ケアカンファレンス 4) リフレクション 3. 臨床場面に即した環境下での安全な看護実践 （卒業到達度Ⅰレベル項目の活用） 1) 提示された事例の対象のイメージ化 2) 知識及び技術の確認 3) 臨床看護の実践能力試験 ①時間内に実施 ②割り込み状況への対応 ③模擬患者・受験者・試験官の3者での振り返り ④評価	
評価方法		テキスト・参考書等	
看護研究（ケーススタディ） 知識確認試験 臨床看護の実践能力試験		わかりやすいケーススタディのまとめ方 既習科目、関連する文献の活用 系統別看護師国家試験問題他看護師国家試験出題基準に準ずる問題集	
実務経験	看護師として培った豊富な経験をもとに講義を行う		
備考			



授業科目 統合実習	担当講師名 担当教員1人/1G	単位数 2 単位 時間数 90 時間	対象学年 3 年次
<p>学習目標（ねらい）</p> <p>1. 複数の対象の援助の優先順位の考え方と時間管理の必要性を理解できる。</p> <p>2. 対象を全人的に捉え、状況や場に応じて既習の知識・技術を引き出し、統合させ、看護を実践する能力を養う。</p>			
日 数	単 元	学 習 内 容 ・ 方 法	
	<p>1. 複数の対象を受け持ち、ケアの優先順位を判断しながら看護が実施できる</p> <p>2. 病棟管理の実際、他部門との調整などを通して看護管理の実際を学ぶ</p> <p>3. 統合実習で学んだことを通しチームの一員としての、自己の目標を明確にすることができる</p>	<p>病院実習 4人編成 10グループ 1グループに教員1名 夜間実習においては、1名の教員が巡回</p> <p>1週目) 複数受け持ち対象の情報収集、看護師のシャドウイング、看護援助の実践</p> <p>2週目) 師長、リーダー、メンバー、夜間実習をローテーションしながら体験</p> <p>3週目) 複数受け持ち対象の看護援助の実践</p> <p>1. 複数受け持ち対象の看護の理解</p> <p>1) 対象に立案されている看護計画と援助の理解</p> <p>2. 看護チームのチームメンバー及びチームリーダーの役割</p> <p>1) 医師への報告、連絡調整</p> <p>2) チーム及びスタッフへの連絡調整</p> <p>3) 病院内外への部門との連絡調整</p> <p>3. 病棟管理者の役割と業務</p> <p>1) 病床管理</p> <p>2) 安全管理</p> <p>3) 他部門との連絡調整</p> <p>4) 看護部組織の中での報告・連絡・調整の実際</p> <p>4. 夜間帯の対象の生活と看護活動</p> <p>1) 夜間の日常生活援助の理解</p> <p>2) 夜間時間の対象の反応</p> <p>5. 複数受け持ち対象への援助</p> <p>1) 複数の対象の援助の優先順位と時間配分を考えた日々の計画立案</p> <p>2) 一人の対象に必要な複数の援助の優先順位と時間配分の調整</p> <p>3) 対象の変化、状況の変化、作業の中断など流動的環境のなかでの援助の実践</p> <p>最終反省会</p>	
評価方法		テキスト・参考書等	
実習評価表に基づく評価			
実務経験	看護師として培った豊富な経験をもとに指導を行う		
備 考			